

2014 年度 1 年間の学修活動に関するアンケートの結果経年変化（報告）

— 2012 年度入学生対象 1 年次から 3 年次の学士力等の推移 —

IR センター教育情報分析室・FD 委員会

I. 趣旨

本学ではこれまで進級時、卒業時の各時点で学士力等に関するアンケートを行ってきており、2014 年度からはすべての学年において年度末アンケートを実施している。各年度末の回答結果についてはすでに報告済みであるが、今回は 2012 年度入学者を対象に、1 年次から 3 年次までの学士力等からみた経年変化（成長の推移）^{注1}を明らかにすることを目的にする。なお、各年度にて実施するアンケート内容に違いがあるため、比較可能な部分のみ報告を行う。

II. 結果

1. 基本的属性

学年ごとの基本的属性（学科、性別）の結果を表 1 に示す。

表1 集計対象者の属性

		合計人数	学科									性別	
			社会福祉 学科	社会教育 学科	福祉心理 学科	産業福祉 マネジメ ント学科	情報福祉 マネジメ ント学科	子ども教 育学科	保健看護 学科	リハビリ テーショ ン学科	医療経営 管理学科	男	女
調査時点	1年次末	654	249	50	66	71	31	114	29	20	24	177	478
	2年次末	489	141	51	51	42	40	66	27	39	32	145	343
	3年次末	242	64	34	41	20	23	40	1	14	5	59	183

2. 調査項目

表 1 に各調査時点で使用された項目、項目カテゴリについてまとめた。カテゴリ「専門性」「教育目標」が順次追加されたため、これら 2 カテゴリについては 3 学年を通しての推移は示されないこととなる。

表1 調査項目 (○は使用項目、×は不使用項目)

カテゴリ	項目	3年次終了時	1年次終了2	1年次終了時
知識・理解	1) 前学年終了時に比べ、さまざまな文化や自分とは異なる文化の立場の人の考えや気持ち、行動をとらえるようになり、多文化・異文化に関する知識が理解できた	○	○	○
	2) 前学年終了時に比べ、歴史的文化的な事象や社会の事象、自然の事象について、その意味とその事象が起きた理由と自分や社会・生活との関連をとらえるようになり、人類の文化・社会と自然に関する知識の理解ができた	○	○	○
	3) 前学年終了時に比べ、将来に出会う社会の問題や人生上の問題の解決に生かせる知識を獲得した	○	○	○
	4) 前学年終了時に比べ、自律・自立した学習(自ら進んで、到達目標と学習計画を立て、実践し、自己および他者による点検や評価を行い、改善と見直しをするという取り組み)をこれから続けていくための知識や情熱を獲得した	○	○	○
汎用的技能	5) 前学年終了時に比べ、他人の話をよく聞き自分の伝えたいことをわかりやすく表現できるようになった	○	○	○
	6) 前学年終了時に比べ、自分とは異なる意見を持つ人と互いを尊重しながらコミュニケーションをとることができるようになった	○	○	○
	7) 前学年終了時に比べ、証拠に基づいてわかりやすく説得力のあるレポートを作成することができるようになった	○	○	○
	8) 前学年終了時に比べ、表やグラフを用いて分析し、理解し、表現することができるようになった	○	○	○
	9) 前学年終了時に比べ、インターネットなどの情報通信技術(ICT)を用いて問題解決のための情報収集ができるようになった	○	○	○
	10) 前学年終了時に比べ、プレゼンテーションソフトなどの情報通信技術(ICT)を用いて問題解決の過程や成果を表現できるようになった	○	○	○
	11) 前学年終了時に比べ、ものごとを多角的かつ論理的に分析できるようになった	○	○	○
態度・志向性	12) 前学年終了時に比べ、時間の管理や健康管理、感情や欲求の適切なコントロール、状況に応じた適切な対処行動など、自らを律して行動できるようになった	○	○	○
	13) 前学年終了時に比べ、他者と協調・協働して、目標の実現のために、問題を共有し、方向性を示し、行動できるようになった	○	○	○
	14) 前学年終了時に比べ、自らの良心と社会の規範やルールにしたがって行動できるようになった	○	○	○
	15) 前学年終了時に比べ、社会の一員としての意識を持ち、人びとの幸せや地域・社会の発展のために積極的に関与できるようになった	○	○	○
	16) 前学年終了時に比べ、自分をよく理解し、将来の展望を描き、キャリア形成に取り組むことができるようになった	○	○	○
	創造的思考力	17) 前学年終了時に比べ、実際場面では出会う課題について、これまで獲得したさまざまな知識と理解、汎用的技能、態度・志向性を総合的に活用して学習活動できるようになった	○	○
18) 前学年終了時に比べ、社会を広く見渡し、疑問に思ったり問題の発見を楽しんだりできるようになった		○	○	○
19) 前学年終了時に比べ、発見した問題について、情報を集め、討議や調査などを行い、ねばり強く分析・整理して解決へ導くことができるようになった		○	○	○
専門性	20) 前学年終了時に比べ、所属する学科の専門的な知識が身に付いた	○	○	×
	21) 前学年終了時に比べ、所属する学科の専門的な技術や技能が身に付いた	○	○	×
	22) 前学年終了時に比べ、所属する学科が目指す態度・志向性や倫理観が身に付いた	○	○	×
教育目標	23) 前学年終了時に比べ、所属する学科が目指す教育研究上の目的や教育目標に近づいた	○	×	×
意欲	24) 前学年終了時に比べ、大学での学習に意欲的に取り組むことができるようになった	○	○	○
	25) 前学年終了時に比べ、大学で教員・友人と意欲的に関わることができるようになった	○	○	○

3. 成長の推移

図 2-1 から図 2-7 まで、項目カテゴリごとに 1 項目ずつ得点を示した。なお、各項目の回答にあたっては「あなた自身のこれらの力が前年度終了時に比べてどれだけ成長したか」を問い、1 (まったくそう思わない) から 6 (非常にそう思う) までの 6 件法で評定を求めた。よって 3.5 以上の数値の場合、「前年度より伸びた」という側での評価であることを示している。

総じて、1 年次終了時から 3 年次終了時まですべての学年の終了時において前年度よりも伸びたという評価が得られているが、その伸びの程度は 1 年次終了時が最も高く、学年があがるにつれて伸びの実感は得られにくくなっているということが明らかとなった。以下、カテゴリごとにまとめる。

図 2-1 はカテゴリ「知識・理解」に含まれる項目の結果である。1 年次終了時に最も伸びを示す項目が多い中で「自律・自立した学修」については 3 年次終了時が最も伸びを示している。

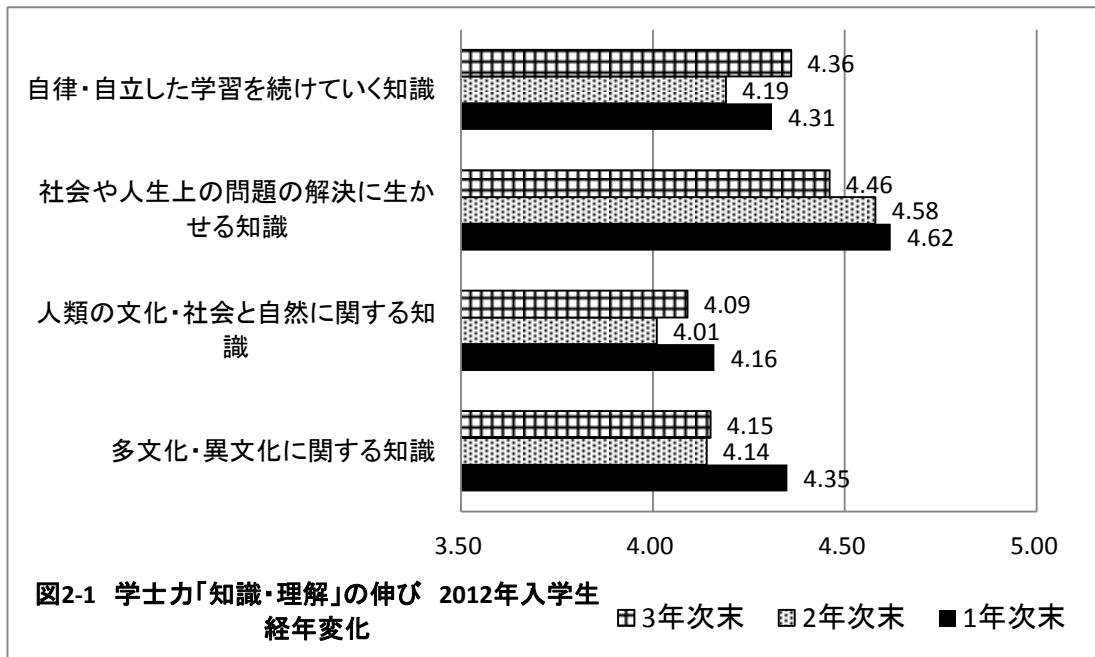


図 2-2 はカテゴリ「汎用性技能」に含まれる項目の結果である。評定値の高さからして、他カテゴリと比べて伸びの実感が得られにくい内容が含まれる項目群と思われる。一方、他カテゴリには存在しない、2 年次に最も伸びを示す項目(レポート作成、表現)も含まれている。

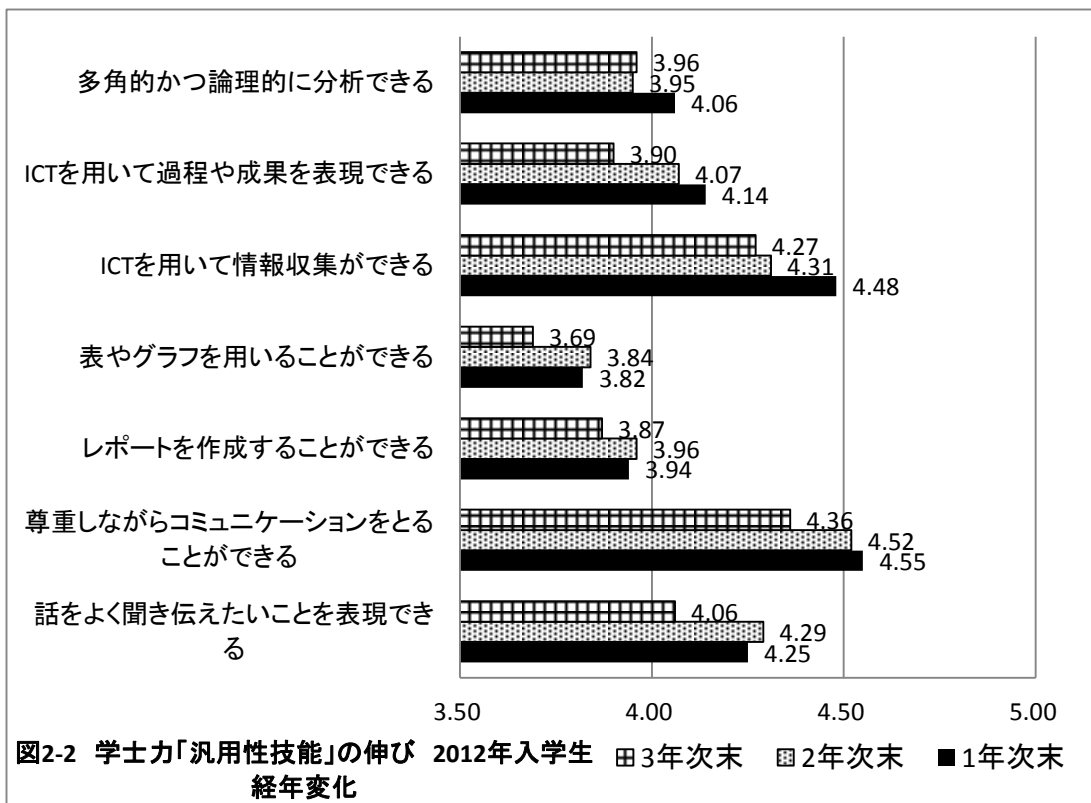


図 2-3 はカテゴリ「態度・志向性」に含まれる項目の結果である。他カテゴリと比べて伸びの実感が得られやすい内容が含まれる項目群と思われる。

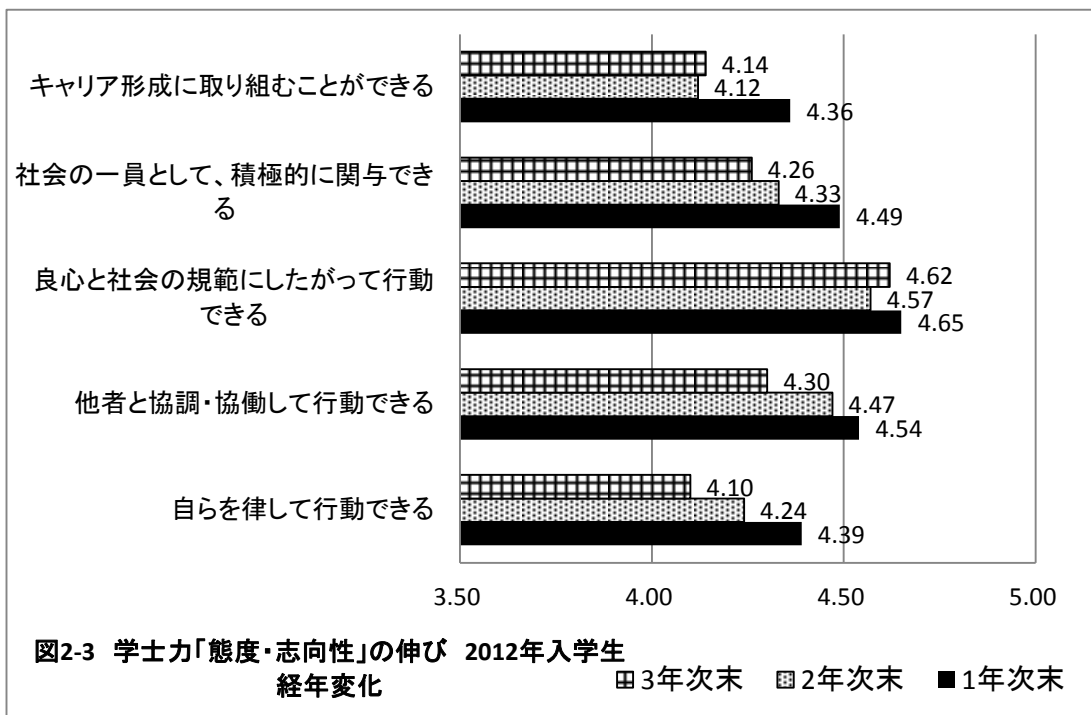


図 2-4 はカテゴリ「創造的思考」に含まれる項目の結果である。他カテゴリと比べて学年間の差異は比較的小さい項目群と思われる。

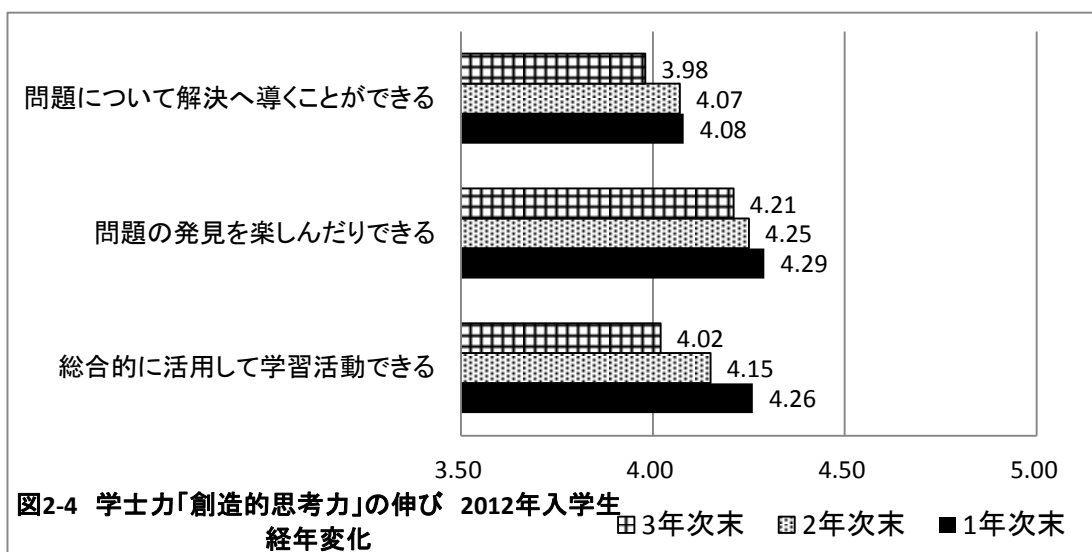


図 2-5 はカテゴリ「専門性」に含まれる項目の結果である。なお本項目群は1年次終了時には調査項目に含まれておらず、2年次終了時と3年次終了時の結果のみ示す。カテゴリ「態度・志向性」と並び、伸びの実感が得られやすい内容が含まれる項目群と思われる。

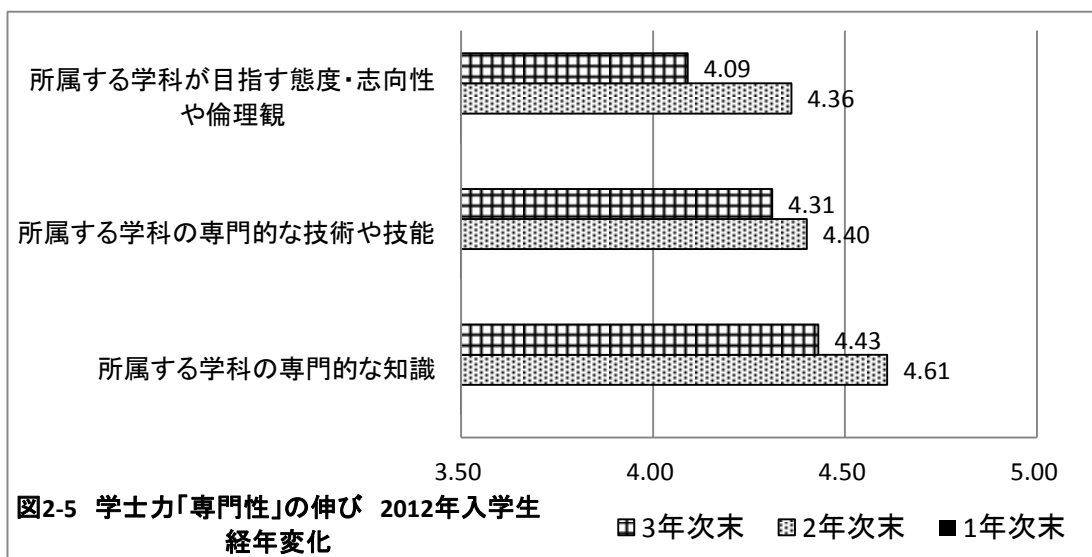


図 2-6 はカテゴリ「教育目標」に含まれる項目の結果である。なお本項目は1年次終了時及び2年次終了時には調査項目に含まれておらず、3年次終了時の結果のみ示す。

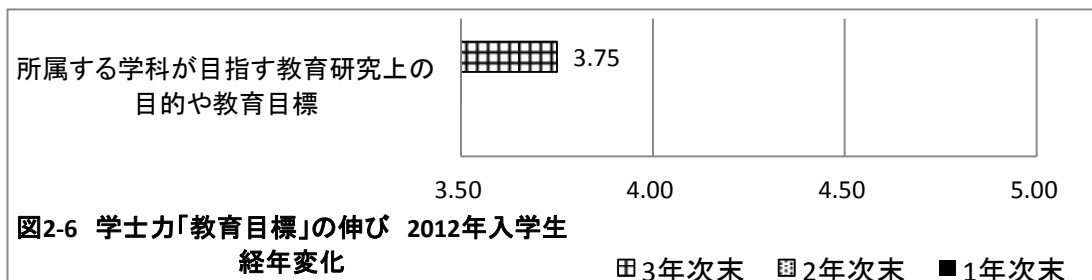
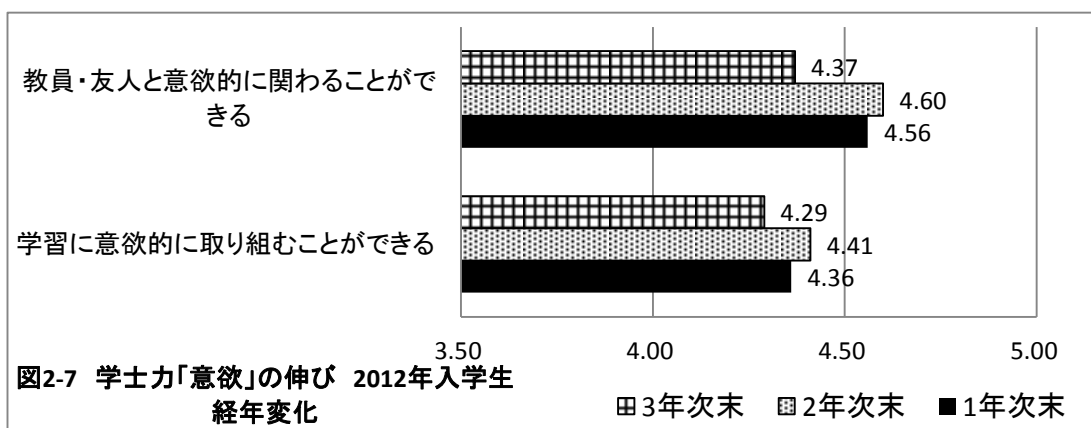


図2-7はカテゴリ「意欲」に含まれる項目の結果である。2項目とも高い伸びが示されている項目文であるが、特に2年次終了時に最も高く伸びが示された項目群と言える。



なお、参考として1要因分散分析を行った結果を表2としてまとめる。本来、本データは同一個人が繰り返し回答するといういわゆる「対応有」のデータである。しかし個人を特定しない形式での調査であるため、3つの調査時点を通しての回答者の特定を行うことができなかった。そのため、仮に「すべてのデータが『別個人からの回答』である場合」との仮定を行い、対応無の1要因分散分析(多重比較：Tukey法)を行った。結果、本節の冒頭に示したように、1年次に最も高い伸びが示され、3年次に低い伸びが示される項目が多いということが示された。

表2 対応無データと見なした際の学年間比較結果

カテゴリ	項目	学年間の差異
知識・理解	多文化・異文化に関する知識	1年次終了時>2年次終了時、3年次終了時
	人類の文化・社会と自然に関する知識	1年次終了時>2年次終了時
	社会や人生上の問題の解決に生かせる知識	—
	自律・自立した学習を続けていく知識	—
汎用的技能	話をよく聞き伝えたいことを表現できる	1年次終了時、2年次終了時>3年次終了時
	尊重しながらコミュニケーションをとることができる	1年次終了時>3年次終了時
	レポートを作成することができる	—
	表やグラフを用いることができる	—
	ICTを用いて情報収集ができる	1年次終了時>2年次終了時、3年次終了時
	ICTを用いて過程や成果を表現できる	1年次終了時>3年次終了時
	多角的かつ論理的に分析できる	—
態度・志向性	自らを律して行動できる	1年次終了時>3年次終了時
	他者と協調・協働して行動できる	1年次終了時>3年次終了時
	良心と社会の規範にしたがって行動できる	—
	社会の一員として、積極的に関与できる	1年次終了時>2年次終了時、3年次終了時
	キャリア形成に取り組むことができる	1年次終了時>2年次終了時、3年次終了時
創造的思考力	総合的に活用して学習活動できる	1年次終了時>3年次終了時
	問題の発見を楽しんだりできる	—
	問題について解決へ導くことができる	—
専門性	所属する学科の専門的な知識	2年次終了時>3年次終了時
	所属する学科の専門的な技術や技能	—
	所属する学科が目指す態度・志向性や倫理観	2年次終了時>3年次終了時
教育目標	所属する学科が目指す教育研究上の目的や教育目標	分析せず
意欲	学習に意欲的に取り組むことができる	—
	教員・友人と意欲的に関わることができる	1年次終了時、2年次終了時>3年次終了時

*1要因分散分析の上多重比較(Tukey法)を行った

4. まとめ

本学の教育における学士力及び専門性からみた成長は、4年間を通じてほとんどの項目で4（かなり）～5（非常に）の評価値にあり、入学から卒業までかなり成長し続けていることが示された。特に、初年次での評価が非常に高く、リエゾンゼミ I^{注 2)}及びリエゾン型総合基礎教育^{注 3)}を中心とする初年次教育の教育効果が高いことが示された。ただし、数量的スキル（表やグラフなど）とレポート作成力は3.5以上の評価値で、成長は示されているものの、他の項目に比べて低く、充実が望まれる。

注

- 1) 全学生を対象としているが、全学生が回答しているわけではなく、しかも1年次の回答者が2年次、3年次で回答しているかどうかの確認をしていない。その意味では、推移が適切といえる。
- 2) リエゾンゼミ Iは本学の初年次ゼミの名称。それまでの初年次ゼミ「人間基礎論」を踏まえつつ、文部科学省「学士課程教育の構築に向けて」（2008年12月、中教審答申）で打ち出された“学士力”の修得をめざしてより充実した内容に改訂し、2011年度より導入された。詳しくは、本学ホームページに掲載のリエゾンゼミ IのWebテキスト「リエゾンゼミ・ナビ『学びとの出会い』」を参照。なお、リエゾンとは“つなぐ”の意味。
- 3) リエゾン型総合基礎教育は、本学の教養教育あるいは基盤教育の名称。本学は、建学の精神「行学一如」と教育の理念「自利・利他円満」を踏まえた特色ある総合基礎教育プログラムを実施してきたが、2015年度より総合基礎教育科目群をその内容から「教養基礎知」「科学知」「実践知」「健康知」の「四つの知」に分けて本学の特色をより鮮明にし、リエゾン型とした。